

# 二世の契

泉鏡花

青空文庫



真中に一棟、小さき屋根の、恰も朝風の海に難破船の倅のやう、且つ破れ且つ傾いて見ゆるのは、此の広野を、久しい以前汽車が横切つた、其の時分の停車場の名残である。

路も纔に通ずるばかり、枯れても未だ葎の結ばれた上へ、煙の如く降りかゝる小雨を透かして、遠く其の寂しい状を視めながら、

「もし、お媼さん、彼処までは何のくらゐあります。」

と尋ねたのは効々しい猟装束。顔容勝れて清らかな少年で、土間へ草鞋穿の脚を投げて、英国政府が王冠章の刻印打つたる、ポネヒル二連発銃の、銃身は月の如く、銃孔は星の如きを、斜に古畳の上に差置いたが、慪う聞く中に、其の鳥打帽を搔取ると、雫するほど額髪ひたいがみの黒く軟かに濡れたのを、幾度も払ひつゝ、太く野路の雨に悩んだ風情。

縁側もない破屋の、横に長いのを二室にした、古び曲んだ柱の根に、齢七十路に余る

一人の媼、糸を繰つて車をぶうく、静にぶうく。

「然うぢやの、もの十七八町もござらうぞ、さし渡しにしては沢山もござるまいが、人の歩行く路は廻り廻り廻つて居るで、半里の余もござりましよ。」と首を引込め、又揺出すやうにして、旧停車場の方を見ながら言つた、媼がしよぼくした目は、恚うやつて遠方のものに摺りつけるまでにしなければ、見えぬのであらう。

それから顔を上げ下しをする度に、恒は何処にか蔵して置くらしい、がツくり窪んだ胸を、伸し且つ竦めるのであつた。

素直に伸びたのを其のまゝ撫でつけた白髪しらがの其それよりも、尚多なおいのは膚はだの皺しわで、就中なかんずく最も深く刻まれたのが、脊せを低く、丁ど糸車を前に、枯野かれのの末に、埴生はにゆうの小屋など引くるめた置物同然に媼を畳み込んで置くのらしい。一度胸を伸して後へ反るやうにした今の様子で見れば、瘡やせさらばうた脊丈せたけ、此の齡よわいにしては些ちと高過ぎる位なもの、すつくと立つたら、五六本細いのがある背戸せどの榛はんの樹立こたちの他に、珍しい枯木かれきに見えよう。肉は干び、皮萎しなびて見るかげもないが、手、胸などの巖がん乗じようさ、渋色しぶいろに亀裂ひびが入つて下塗したぬりの漆うるしで固めたやう、未だく目立つのは鼻筋きつぱりの判然きつぱりと通つて居る顔かお備そなえと。

黒ずんだが鬱金うこんの裏の附いた、はぎくの、之はまた美しい、褪あせては居るが色々、浅あ

葱<sup>さぎ</sup>の麻<sup>あさ</sup>の葉、鹿子<sup>かのこ</sup>の緋<sup>ひ</sup>、国の習<sup>ならひ</sup>で百軒<sup>ひゃくけん</sup>から切<sup>き</sup>一ツづゝ集<sup>あつ</sup>めて継<sup>つ</sup>ぎ合<sup>あ</sup>す処<sup>ところ</sup>がある、其のちやんくを着<sup>ま</sup>て、前帶<sup>まえおび</sup>で坐<sup>ま</sup>つた形<sup>かたち</sup>で。

彼<sup>か</sup>の古戦場<sup>こせんば</sup>を過<sup>よ</sup>つて、矢叫<sup>やさけび</sup>の音<sup>おと</sup>を風<sup>かぜ</sup>に聞<sup>き</sup>き、浅茅<sup>あさじ</sup>が原<sup>はら</sup>の月影<sup>げつえい</sup>に、古<sup>いにしえ</sup>の都<sup>みやこ</sup>を忍<sup>しの</sup>ぶたぐひの、心<sup>こころ</sup>ある人<sup>ひと</sup>は、此<sup>こゝ</sup>の媼<sup>おうな</sup>が六十年<sup>むそねん</sup>の昔<sup>むかし</sup>を推<sup>すい</sup>して、世<sup>よ</sup>にも希<sup>まれ</sup>なる、容色<sup>ようしき</sup>よき上<sup>じやうろう</sup> 藤<sup>ふじ</sup>として差<sup>さ</sup>しつかえ支<sup>し</sup>はないと思<sup>おも</sup>ふ、何<sup>なん</sup>となく犯<sup>おか</sup>し難<sup>がた</sup>き品位<sup>びんゐ</sup>があつた。其<sup>その</sup>の尖<sup>とんが</sup>つた顰<sup>あぎと</sup>のあたりを、すらく<sup>なび</sup>と靡<sup>なび</sup>いて通<sup>と</sup>る、綿<sup>わた</sup>の筋<sup>すぢ</sup>の幽<sup>かすか</sup>に白<sup>しろ</sup>きさへ、やがて霜<sup>しも</sup>になりさうな冷<sup>つめた</sup>い雨<sup>あめ</sup>。

少年<sup>せうねん</sup>は炉<sup>ろ</sup>の上<sup>うへ</sup>へ両手<sup>りやうて</sup>を真直<sup>まつすぐ</sup>に翳<sup>かざ</sup>し、斜<sup>ななめ</sup>に媼<sup>おうな</sup>の胸<sup>むね</sup>のあたりを窺<sup>うかが</sup>うて、

「はあ其<sup>その</sup>では、何<sup>なん</sup>か、他<sup>ほか</sup>に通<sup>と</sup>るものがあるんですか。」

媼<sup>おうな</sup>は見返<sup>みかへ</sup>りもしないで、真向<sup>まっこう</sup>正面<sup>しょうめん</sup>に渺<sup>びやう</sup>々<sup>びやう</sup>たる荒野<sup>あれの</sup>を控<sup>くわ</sup>へ、

「他<sup>ほか</sup>に通<sup>と</sup>るかとは、何<sup>なん</sup>かでござるの。」

「否<sup>いいえ</sup>、今<sup>いま</sup>謂<sup>い</sup>つたぢやないか、人<sup>ひと</sup>の通<sup>と</sup>る路<sup>みち</sup>は廻<sup>まわ</sup>りく<sup>うね</sup>蛇<sup>うね</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るつて。だから聞<sup>き</sup>くんですが、他<sup>ほか</sup>に何<sup>なん</sup>か歩<sup>ある</sup>行<sup>いく</sup>きますか。」

「やれもう、こんな原<sup>はら</sup>ぢやもの、お客<sup>きやく</sup>様<sup>さま</sup>、狐<sup>きつね</sup>も犬<sup>いぬ</sup>も通<sup>と</sup>りませいで。霧<sup>きり</sup>がかゝりや、歩<sup>ある</sup>かうず、雲<sup>うみ</sup>が下<sup>おり</sup>りや、走<sup>はし</sup>らうず、蜈蚣<sup>むかで</sup>も潜<sup>もく</sup>れば蝗<sup>いなご</sup>も飛<sup>と</sup>ぶわいの、」と孫<sup>まご</sup>にものいふやう、顧<sup>かえり</sup>みて打<sup>うち</sup>微<sup>ほ</sup>笑<sup>え</sup>む。

## 二

此の口からなら、譬<sup>たと</sup>ひ鬼が通る、魔が、と言つても、疑<sup>と</sup>ふ処<sup>ところ</sup>もなし、又然<sup>そ</sup>う信ずればと驚くことはないのであつた。少年は姓桂木<sup>かつらぎし</sup>氏、東京なる某<sup>なにがし</sup>学校の秀才で、今年夏のはじめから一種憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な病にかゝり、日を経るに従うて、色も、心も死灰<sup>しかい</sup>の如く、やがて石碑<sup>しづみ</sup>の下に形なき祭を享けるばかりになつたが、其の病の原因<sup>もと</sup>はと、渠<sup>かれ</sup>を能く知る友だちが密<sup>ひそ</sup>かに言ふ、仔細<sup>しそ</sup>あつて世を早<sup>はや</sup>うした恋なりし人の、其の姉<sup>あね</sup>君<sup>きみ</sup>なる貴夫人より、一<sup>いつ</sup>挺<sup>ちやう</sup>最新式の獵銃<sup>う</sup>を賜<sup>たま</sup>はつた。が、爰<sup>ここ</sup>に差置<sup>さしお</sup>いた即<sup>すなわち</sup>是<sup>これ</sup>。武器を参らす、郊外に獵などして、自ら励まし給<sup>たま</sup>へ、聞くが如き其の容体<sup>ようだい</sup>は、薬も看<sup>み</sup>護<sup>とり</sup>も効<sup>かい</sup>あらずと医師のいへば。但<sup>ただ</sup>御身<sup>おんみ</sup>に恙<sup>つつが</sup>なきやう、わらはが手はいつも銃の口に、と心を籠<sup>こ</sup>めた手紙を添<sup>そ</sup>へて、両三日<sup>にち</sup>以前に御使者<sup>ごししや</sup>到来。凭<sup>よ</sup>りかゝつた胸の離れなかつた、机<sup>とこ</sup>の傍<sup>そば</sup>にこれを受取ると、額<sup>ひたい</sup>に手を加ふること頃刻<sup>けいこく</sup>にして、桂木は猛然として立つたのである。

扱<sup>さて</sup>今<sup>こん</sup>朝<sup>ちやう</sup>、此の辺からは煙も見えず、音も聞えぬ、新停車場<sup>ステーション</sup>で唯一人<sup>ただ</sup>下り立つて、

朝霧あさぎりの濃こまやかな野中のなかを歩ほして、雨になつた午の時過とぎ、媼おうなの住居すまいに駈かけ込んだまで、未まだ嘗かつて一度も煙を銃身からに絡かめなかつた。

桂木は其の病やまざる前ぜんの性質しやうに復ふしたれば、貴夫人きふじんが情ある贈物むくに酬むくいるため——函嶺はこねを越ゆる時汽車の中で逢あつた同窓の学友がくゆうに、何処どこへ、と問はれて、修善寺しゆぜんじの方かたへ蜜月みつづきの旅と答へた——最愛なる新婚の婦ふ、ポネヒル姫の第一発は、仇あだに田嶋山鳩たしぎやまばと如きを打たず、願ねがはくは目覚めしき獲物ひつさを提ひげて、土産みやげにしようと思つたので。

時ならぬ洪水、不思議の風雨ふううに、隙ひまなく線路を損そこはれて、官線ならぬ鉄道は其の停車ステエシ場ヤを更かへた位、殊ことに桂木いつの家族に取つては、祖先、此の国を領した時分から、屢々しばしば易やすからぬ奇怪の歴史を有する、三里の荒野あれのを跋ばつ渉しやうして、目に見ゆるもの、手に立つもの、對手あいてが人類の形でさへなかつたら、覚えの狙撃ねらいうちで射いて取らうと言ふのであるから、霧も雲も歩ある行くと語つた、仔細ありげな媼おうなの言を物ともせず、暖めた手で、びツしよりの草鞋わらじの紐ひもを解ときかける。

油断はしないが俯向うつむいたまゝ、

「私は又また不思議な物でも通るかと思つて悚然ぞつとした、お媼ばあさん、此様こんな処ところに一人で居て、昼間だつて怖おそしくはないのですか。」

桂木は疾く媼の口の、炎でも吐けよかしと、然り気なく誘ひかける。

媼は額の上に綿を引いて、

「何が恐しからうぞ、今時の若いお人にも似ぬことを言はつしやる、狼より雨漏が恐しいと言ふわいの。」

と又背を屈め、胸を張り、手でこするが如くにし、外の方を覗いたが、

「むかうへむくく」と霧が出て、そつとして居る時は天気ぢやがの、此方の方から雲が出て、そろ／＼両方から歩行びよつて、一所になる時が此の雨ぢや。びし／＼降ると寒うござるで、老寄には何より恐しうござるわいの。」

「あゝ、私も雨には弱りました、じと／＼其処等中へ染込んで、この気味の悪さと云つたらない、お媼さん。」

「はい、御難儀でござつたら。」

「お邪魔ですが此処を借ります。」

桂木は足袋を脱ぎ、足の爪尖を取つて見たが、泥にも塗れず、綺麗だから、其のまゝ筵の上へ、ずいと腰を。

たとひ洗足を求めた処で、媼は水を汲んで呉れたか何うだか、根の生えた居ずまひで、



例の仕事に余念のなさ、小笹を風が渡るかと……音につれて積る白糸。

三

桂木は濡れた上衣を脱ぎ棄てた、カラアも外したが、炉のふちに尚油断なく、

「あゝ、腹が空いた。最う／＼降るのと溜つたので濡れ徹つて、帽子から雫が垂れた時は、色も慾も無くなつて、筵が一枚ありや極楽、其処で寝たいと思つたけれど、恚うしてお世話になつて雨露が凌げると、今度は虫が合点しない、何ぞ食べるものはありませんか。」

「然ればなう、恐し気な音をさせて、汽車とやらが向うの草の中を走つた時分には、客も少々はござつたで、瓜なと剥いて進ぜたけれど、見さつしやる通りぢやでなう。私が食べるばかり、其も黍を焚いたのぢやほどに、逆もお口には合ふまいぞ。」

「否、飯は持つてます、何うせ、人里のないう承知だつたから、竹包にして兵糧は持参ですが、お菜にするものがないんです、何か些と分けて貰ひたいと思ふんだがね。」

おうな  
媼は胸を折つてゆるやかに打領うちうなずき、

「それならば待たしやませ、塩しよツぱいが味噌漬みそづけの香かうの物がござるわいなう。」

「待ちたまへ、味噌漬みそづけなら敢あえてお手数てすうに及ぶまいと思ひます。」

と手早くてばや笹ささの葉はを解ほどくと、硬こわいのがしやつちこばる、包つつみの端はしを圧おさへて、草臥くたびれた両手りやうてをつき、畏かしこまつて熟じつと見て、

「それ、言はないこつちやない、果して此こゝの菜さいも味噌漬みそづけだ。お媼おばあさん、大きな野のだの、奥山おくやまへ入るには、梅干うめぼしを持たぬものだつて、宿しゆくの者が言つたつけ、然そうなのかね、」と顔を上げて又また瞻みまもつたが、恚いかる相好そうこうの媼おうなを見たのは、場末やまはしの寄席よせの寂せきとして客きやくが唯ただ二三の時とき、片隅かたすみに猫ねこを抱かかいてしよんぼり坐まつて居たのと、山やまの中で、薪たきぎを背負しよつて歩行あるいて居たのと、これで三人目さんにんめだと桂木けいぎは思ひ出した。

媼おうなは皺しわだらけの面つらの皺しわも動かさず、

「何どうござらうぞ、食たべて悪いことはなからうがや、野山のやまの人は、一層いっそうのこと霧きりの毒どくを消けすものぢやといふげにござる。」

「然そう、」とばかり見詰みづめて居た。

此このとき時とき気けだるさうにはじめて振向ふりむき、

「あのまた霧の毒といふものは恐<sup>おそ</sup>しいものでなう、お前様、今日は彼<sup>あれ</sup>が雨になつたればこそ可<sup>よ</sup>うござつた、ものの半日も冥<sup>よみじ</sup>土のやうな煙の中に包まれて居て見やしやれ、生命<sup>いのち</sup>を取られいだから三月四月煩<sup>みつきよつあずら</sup>うげな、此<sup>ここ</sup>処の霧は又格別<sup>かくべつ</sup>ぢやと言ふわいなう。」

「あの、霧が、」

「お客様、お前さま、はじめて此<sup>ここ</sup>処を歩<sup>ある</sup>行かつしやるや？」

桂木は大胆に、一口食べかけたのをぐツと呑<sup>のみ</sup>込み、

「はじめてだとも。聞<sup>き</sup>いちや居<sup>ゐ</sup>ただけれど。」

「然<sup>そ</sup>うぢやろ、然<sup>そ</sup>うぢやろ。」と媼<sup>おうな</sup>はまた領<sup>うなず</sup>いたが、單<sup>ただ</sup>然<sup>そ</sup>うであらうではなく、正<sup>まさ</sup>に然<sup>そ</sup>うなくてはかなはぬと言<sup>い</sup>つたやうな語氣であつた。

「而<sup>そ</sup>して何かの、お前様其<sup>そ</sup>の鉄砲を打<sup>う</sup>つて歩<sup>ある</sup>行かしやるでござるかの。」と糸を繰<sup>く</sup>る手を両<sup>ひら</sup>方に開<sup>ひら</sup>いてじつと、此の媼の目は、怪しく光<sup>ひ</sup>つた如くに思はれたから、桂木は箸<sup>はし</sup>を置き、心で身<sup>みがまえ</sup>構<sup>く</sup>をして、

「これかね。」と言ふをきツかけに、ずらして取<sup>と</sup>つて引寄せた、空の模様、小雨<sup>こさめ</sup>の色、孤<sup>ひ</sup>家の裡<sup>うち</sup>も、媼の姿も、さては炉の中の火さへ淡<sup>すべ</sup>く、凡<sup>すべ</sup>て枯野<sup>かれの</sup>に描<sup>え</sup>かれた、幻<sup>あいだ</sup>の如き間に、ボネヒル連発銃の銃身のみ、青く閃<sup>きらめ</sup>くまで磨ける鏡かと壁を射<sup>い</sup>て、弾<sup>たまごめ</sup>込<sup>こ</sup>めたのがづツし

り手応。  
てこたえ。

我ながら頼母しく、  
たのも

「何、まあね、何うぞこれを打つことのないやうにと、内々祈つて居るんだよ。」  
ないない

「其はまた何といふわけでござらうの。」と澄して、例の糸を繰る、五体は悉皆、車の  
すま

仕かけで、人形の動くやう、媼は少頃も手を休めず。  
しばらく

驚破といふ時、綿の条を射切つたら、胸に不及、咽喉に不及、玉の緒は絶えて媼は  
すわ

唯一個、朽木の像にならうも知れぬ。  
ただ一つこ

と桂木は心の裡。  
うち

#### 四

構はず兵糧を使ひつゝ、  
ひようろう

「だつてお媼さん、此の野原は滅多に人の通らない処だつて聞いたからさ。」  
ばあ

「そりや最う眺望というても池一つあるぢやござらぬ、纔ばかりの違でなう、三島はお富  
ながめ

土山の名所ぢやに、此処は慍う一目千里の原なれど、何が邪魔をするか見えませぬ、其れ  
じさま

ぢやもの、ものずきに来る人は無いのぢやわいなう。」

「否いいえさ、景色がよくないから遊山ゆさんに来ぬの、便利が悪いから旅の者が通行せぬのと、そんなつい通りのことぢやなくさ、私たちが聞いたのでは、此の野中のなかへ入ることを、俗に身を投げると言ひ伝へて、無事にや歸られないんださうではないか。」

「それはお客様、此処ここといふ限はござるまいがなう、躓つまずけば転びもせず、転びやうが悪ければ怪我けがもせうず、打うち 処ところが悪ければ死にもせうず、野でも山でも海でも川でも同じこととでござるわなう、其につけても、然そう又また人のいふ処ところへ、お前様は何をしに来さつしやつた。」

じろりと流盼しりめに見ていつた。

桂木はぎよつとしたが、

「理窟りくつを聞くんぢやありません、私はね、実はお前さんのやうな人に逢あつて、何か變つた話をして貰もらはう、見られるものなら見ようと思つて、遙々はるばる出向いて来たんだもの。人間ほかに歩行あるくものがあるといふから、扱さてこそ乗つかゝりや、霧や雲の動くことになつて了しまふし、活かしちや返さぬやうな者が住んででも居るやうに聞いたから、其を尋ねりや、怪我けが過失あやまちは所を定めないといふし、それぢや些ちつとも張合はりあいがありやしない、何か珍しい

ことを話してくれませんか、私はね。」

膝を進めて、瞳を据ゑ、

「私はね、お媼さん、風説を知りつゝ、慍うやつて一人で来た位だから、打明けて云ひます、見受けた処、君は何だ、様子が宛然野の主とでもいふべきぢやないか、何の馬鹿々々しいと思ふだらうが、好事です、何うぞ一番構はず云つて聞かしてくれ給へな。」

慍ういふと何かお妖の催促をするやうでをかしいけれど、焦れツたくツて堪らない。

素より其のつもりぢや来たけれど、私だつて、これ当世の若い者、はじめから何、人の命を取るたつて、野に居る毒虫か、函嶺を追はれた狼だらう、今時詰らない妖者が居てなりますか、それとも野伏り山賊の類でもあらうかと思つて来たんです。霧が毒だつたり、怪我過失だつたり、心の迷ぐらゐなことは実は此方から言ひたかつた。其をあつちこつちに、お前さんの口から聞かうとは思はなかつた。其の癖、此方はお媼さん、お前さんの姿を見てから、却つて些と自分の意見が違つて来て、成程これぢや怪しいことのないとも限らぬか、と考へてる位なんだ。

お聞きなさい、私が縁続きの人はね、商人で此の節は立派に暮して居るけれど、若いうち一時困つたことがあつて、瀬戸のしけものを背負つて、方々国々を売つて歩行い

て、此の野に行暮れて、其の時草茫々とした中に、五六本樹立のあるのを目当に、一軒家へ辿り着いて、台所口から、用を聞きながら、旅に難渋の次第を話して、一晚泊めて貰ふとね、快く宿をしてくれて、何うして何うして行暮れた旅商人如きを、待遇すやうなものではない、銚子杯が出る始末、少い女中が二人まで給仕について、寝るにも紅裏の絹布の夜具、枕頭で佳い薫の香を焚く。容易ならぬ訳さ、せめて一生に一晩は、恁ういふ身の上にと、其の時は思つた、其の通つたもんだから、夢なら覚めるなど一夜明かした迄は可かつたさうだが。

翌日になると帰さない、其晩女中が云ふには、お奥で館が召しますつき。

其の人は今でも話すがね、館といったのは、其は何うも何とも気高い美しい婦人ださうだ。しかし何分生胆を取られるか、薬の中へ鍊込まれさうで、恐さが先に立つて、片時も目を瞑るわけには行かなかつた。

私が縁続きの其の人はね、親類うちでも評判の美男だつたのです。」

## 五

桂木は伸びて手首を蔽はんとする、襦衣の袖を捲き上げたが、手も白く、戦を挑むやうではない優しやかなものであつた、けれども、世に力あるは、却つて恁る少年の意を決した時であらう。

「さあ、館の心に従ふまでは、村へも里へも帰さぬといったが、別に座敷牢へ入れるでもなし、木戸の扉も葎を分けて、ぎいと開け、障子も雨戸も開放して、真昼間、此の野を抜けて帰らるゝものなら、勝手に帰つて御覧なさいと、然も輕蔑をしたやうに、あは、あは笑ふと両方の縁へふたつに別れて、二人の其の侍女が、廊下づたひに引込むと、あとはがらんとして、晝数十五晝も敷けようといふ、広い座敷に唯一人。」

折から炉の底にしよんぼりとする、掬ふやうにして手づから燻した落葉の中に二枚ばかり荊の葉の太く湿つたのがいぶり出した、胸のあたりへ煙が弱く、いつも勢よくは焚かぬさうで冷い灰を、舐めるやうにして、一ツ蛭つて這ひ上るのを、肩で乱して払ひながら「煙い。其までは宛然恁う、身体へ絡つて、肩を包むやうにして、侍女の手だの、袖だの、裾だの、屏風だの、襖だの、蒲団だの、膳だの、枕だのが、あの、所狭きまでといふ風であつたのが、不残ずツと引込んで、座敷の隅々へ片着いて、右も左も見通しに、開放しの野原も急に広くなつたやうに思はれたと言ひます。



然<sup>そ</sup>うすると、急に秋風が身に染<sup>し</sup>みて、其の男はぶるゝと震へ出したさうだがね、寂<sup>しんか</sup>閑<sup>かん</sup>として人<sup>ひと</sup>ツ児<sup>こひとり</sup>一人居さうにもない。

夢<sup>うつつ</sup>か現<sup>あら</sup>かと思う位<sup>くらい</sup>。」

桂木は語りながら、自<sup>みづか</sup>ら其の境遇に在<sup>あ</sup>る如<sup>ごと</sup>く、

「目を瞑<sup>ねむ</sup>つて耳<sup>みみ</sup>を澄<sup>すま</sup>して居ると、二重、三重、四重ぐらゐ、壁<sup>かべ</sup>越<sup>こ</sup>しに、琴<sup>こと</sup>の糸に風が渡つて揺れるやうな音で、細<sup>ほそ</sup>く、ひゆうゝと、お嫗<sup>ばあ</sup>さん、今お前さんが言つてる其の糸車<sup>いとぐるま</sup>だ。此<sup>この</sup>の炉<sup>ろ</sup>を一<sup>ひと</sup>ツ、恚<sup>こ</sup>うして爰<sup>ここ</sup>で聞<sup>き</sup>いて居てさへ遠<sup>とほ</sup>い処<sup>ところ</sup>に聞<sup>き</sup>えるが、其<sup>その</sup>音<sup>おと</sup>が、幽<sup>かすか</sup>にしたとね。其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>茫<sup>ぼん</sup>乎<sup>やう</sup>と思<sup>おも</sup>ひ出<sup>で</sup>したのは、昨<sup>ゆう</sup>夜<sup>べ</sup>の其<sup>その</sup>の、奥<sup>おく</sup>方<sup>かた</sup>だか、姫<sup>ひめ</sup>様<sup>さま</sup>だか、それとも御<sup>ご</sup>新<sup>しん</sup>姐<sup>ぞ</sup>だか、魔<sup>ま</sup>だか、鬼<sup>おに</sup>だか、お聞<sup>きこ</sup>へ召<sup>め</sup>しました一件<sup>いっけん</sup>のお館<sup>やかた</sup>だか、当<sup>ただ</sup>座<sup>ざ</sup>は唯<sup>ただ</sup>赫<sup>かつ</sup>と取<sup>とり</sup>逆<sup>さか</sup>上<sup>のぼ</sup>て、四<sup>あ</sup>辺<sup>へ</sup>のものは唯<sup>ただ</sup>曇<sup>どん</sup>つた硝<sup>びいどろ</sup>子<sup>こ</sup>を透<sup>とお</sup>かして、目<sup>め</sup>に映<sup>うつ</sup>つたままでの事<sup>こと</sup>だつたさうだけれど。

緋<sup>は</sup>の袴<sup>かま</sup>を穿<sup>は</sup>いても居なけりや、搔<sup>かい</sup>取<sup>とり</sup>を着<sup>き</sup>ても届<sup>とど</sup>かない、たゞ、輝<sup>きら</sup>々<sup>きら</sup>した蒔<sup>ま</sup>絵<sup>え</sup>もの<sup>もの</sup>が揃<sup>そろ</sup>つて、あたりは神<sup>こう</sup>々<sup>こう</sup>しかつた。狭<sup>ひと</sup>い一<sup>ひと</sup>室<sup>むろ</sup>に、束<sup>たば</sup>髪<sup>ねがみ</sup>の引<sup>ひ</sup>かけ帯<sup>おび</sup>で、ふつくりした美<sup>い</sup>い女<sup>を</sup>が、糸<sup>いと</sup>車<sup>ぐるま</sup>を廻<sup>まわ</sup>して居たが、燭<sup>ろう</sup>台<sup>たい</sup>につけた蠟<sup>ろう</sup>燭<sup>そく</sup>の灯<sup>ほ</sup>影<sup>かげ</sup>に、横<sup>よこ</sup>顔<sup>がほ</sup>で、旅<sup>たび</sup>商<sup>あきう</sup>人<sup>ど</sup>、私<sup>わたし</sup>の其<sup>その</sup>の縁<sup>えん</sup>続<sup>つづ</sup>きの美<sup>み</sup>男<sup>おとこ</sup>を見<sup>み</sup>向<sup>む</sup>いて、

(主<sup>ぬし</sup>のあるものですが、一<sup>いっ</sup>所<sup>しょ</sup>に死<sup>し</sup>んで下<sup>くだ</sup>さいませんか。)—と唯<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>言<sup>こと</sup>いつたのださう

だ。

いや、最<sup>も</sup>う六十になるが忘れないとき、此の人は又<sup>そ</sup>然ういふよ、其れから此方<sup>こつち</sup>、都にも鄙<sup>ひな</sup>にも、其れだけの美女を見ないツて。

さあ、其の糸車のまはる音を聞くと、白い柔かな手を動かすまで目に見えるやうで、其のまゝ氣の遠くなる、其が、やがて死ぬ心<sup>こころもち</sup>持に違ひがなければ、鬼でも構はないと思つたけれども、何<sup>ど</sup>うも未<sup>ま</sup>だ浮世<sup>うきよ</sup>に未練があつたから、這<sup>は</sup>ふやうにして、蹻<sup>あしおと</sup>音を盗んで出て、脚絆<sup>きやはん</sup>を附けて草鞋<sup>わらじ</sup>を穿<sup>は</sup>くまで、誰も遮<sup>さえぎ</sup>る者はなかつたさうだけれど、それが又、敵の囀<sup>かこい</sup>を蹴散<sup>けち</sup>らして遁<sup>に</sup>げるより、工合<sup>ぐあい</sup>が悪い。

帰らるゝなら帰つて見ると、女どもが云つた呪<sup>まじない</sup>詛<sup>ことば</sup>のやうな言も凄<sup>すご</sup>し、一足棟<sup>ひとあしむね</sup>を離れるが最後、岸破<sup>がば</sup>と野が落ちて地の底へ沈まうも知れずと、爪立<sup>つまだて</sup>足で、びくゝしながら、それから一生懸命に、野路<sup>のみち</sup>にかゝつて遁<sup>に</sup>げ出した、伊豆の伊東へ出る間道<sup>かんどう</sup>で、此処<sup>ここ</sup>を放れたまで何の障<sup>さわ</sup>りもなかつたさうで。

たゞ、些<sup>ち</sup>と時節が早かつたと見えて、三島の山々から一<sup>ひと</sup>なだれの茅萱<sup>ちがや</sup>が丈<sup>たけ</sup>より高い中から、ごそごそと彼処<sup>あつちこつち</sup>此処<sup>このこ</sup>、野馬<sup>のうま</sup>が顔を出して人珍<sup>みづか</sup>しげに瞞<sup>ま</sup>めては、何処<sup>どこ</sup>へか隠れて了<sup>しま</sup>ふのと、蒼空<sup>あおぞら</sup>だつたが、ちぎれゝに雲の脚<sup>あし</sup>の疾<sup>はや</sup>いのが、何<sup>ど</sup>んな変事でも起らうかと思はれ

て、活きた心地はなかつたと言ふ話ぢやないか。  
 それだもの、お嫗さん。」

## 六

「もし、そんなことが、真個にある処なら、生命がけだつてねえ、一度来て見ずには居られないとは思ひませんか。

何しに來たつて、お前さんが咎めるやうに聞くから言ふんだが、何も其の何うしよう、  
 慥うしようといふ悪氣はない。

好事さ、好事で、變つた話でもあつたら聞かう、不思議なことでもあるなら見よう

と思ふばかり、しかしね、其を見聞くにつけては、どんな又対手に不心得があつて、危  
 険でないとも限らぬから、其処で慥う、用心の銃をかついで、食べる物も用意した。

台場の停車場から半道ばかり、今朝此原へかゝつた時は、脚絆の紐も緊乎と、  
 草鞋もさツくと新しい踏心地、一面に霧のかゝつたのも、味方の狼煙のやうに勇しく  
 踏込むと、さあ、一ツ一ツ、萱にも尾花にも心を置いて、葉末に目をつけ、根を窺ひ、ま

るで、美しい葦きでも搜す形。

葉ずれの音がざわ／＼と、風が吹く度たびに、遠くの方で、

(主ぬしあるものですが、)とでも囁ささやいて居るやうで、頼母たのもしいにつけても、髑髏しやれこうべの形を

した石塊いしころでもないか、今にも馬の顔つらが出はしないかと、宝たからの蔓つるでも手繰たぐる気で、茅萱ちがやの

中の細路ほそみちを、胸騒むなさわぎがしながら歩行あるいたけれども、不思議なものは樹きの根にも出でくわ

さない、唯ただ、彼のこはれ／＼の停車場ステエシヨンのあとへ来た時、雨露あめつゆに曝さらされた十字りていの里

程標ひようが、枯草かれくさの中に、横になつて居るのを見て、何となく荒野あれのの中の礫はりつけ柱ばしらで

もあるやうに思つた。

おゝ、然そういへば沢山たんと古い昔ではない、此の国の歴々れきれきが、此処ここに鷹狩たかがりをして歸りが

け、秋草あきぐさの中に立つて居た媚なまめかしい婦人おんなの、あまりの美しさに、予かねての色いろ好み、うつ

かり見惚みとれるはずみに鞍くらを外はずして落馬うちどころした、打処うちどころが病やまいのもとで、あの婦人おんなともを為させ

ろ、と言いひ死しにに亡くなられた。

あとでは魔法づかひだ、主殺しゅころしと、可哀相はりつけに、此の原で礫はりつけにしたとかいふ。

日本にっぽん一の無法やつらな奴等やつら、かた／＼殿様とぎのお伽とぎなればと言つて、綾錦あやにしきの粧よそおいをさせ、

白足袋しろたびまで穿はかせた上、犠牲いけにえに上げたとやら。

南無三宝、此の柱へ血が垂れるのが序開きかと、其十字の里程標の白骨のやうなのを見て居る中に、凭かゝつて居た停車場の朽ちた柱が、風もないに、身体からだの圧おしで動かから、鉄砲を取直しながら後退りに其処を出た。

雨は其の時から降り出して、それからの難儀さ。小糠雨の細いのが、衣服の上から毛穴を徹して、骨に染むやうで、天窓は重くなる、草鞋は切れる、疲労は出る、雫は垂る、あゝ、新しい筵があつたら、棺の中へでも寝たいと思つた、其で此の家を見つけたんだもの、何の考へもなしに駈け込んだが、一呼吸して見ると、何うだらう。」

炉の火はパツと炎尖を立てて、赤く媼の額を射た、瞻らるゝは白髪である、其皺である、目鼻立である、手の動くのである、糸車の廻るのである。

慙くても依然として胸を折つて、唯糸に操らるゝ如き、媼の状を見るにつけても、桂木は膝を立てて屹となつた。

「失礼だが、お媼さん、場所は場所だし、末枯だし、雨は降る、普通ものとは思へないぢやないか。霧が雲がと押問答、謎のかけツこ見たやうなことをして居るのは、最う焦れつたくつて我慢が出来ぬ。そんなまだるっこい、気の滅入る、糸車なんぞ横倒しにして、面白いことを聞かしておくれ。」

それとも人が来たのが煩くツて、癩に障つたら、さあ、手取り早く何うにかするんだ、  
牙<sup>きば</sup>にかけるなり、炎<sup>は</sup>を吐くなり、然<sup>そ</sup>うすりや叶<sup>かな</sup>はないまでも抵抗<sup>てむかい</sup>しよう、善にも悪にも  
恚<sup>こ</sup>うして居ちや、じり／＼して胸が苦しい、じみ／＼雨で弱らせるのは、第一何<sup>なに</sup>にしる卑  
怯<sup>いた</sup>の到りだ、さあ、さあ、人間でさいなくなりや、其を合図で勝負にしよう、」と微笑を  
泛<sup>うか</sup>べて串<sup>じょうだん</sup>戯<sup>あそ</sup>らしく、身悶<sup>みもだえ</sup>をして迫りながら、桂木の瞳<sup>ひとみ</sup>は据<sup>すわ</sup>つた。  
血氣<sup>けつき</sup>に逸<sup>はや</sup>る少年の、其の無邪氣さを愛する如く、離れては居るが顔と顔、媼<sup>な</sup>は嘗<sup>な</sup>めるや  
うにして、しよ／＼と目を睜<sup>みひら</sup>き、

「お客様もう降つて居<sup>い</sup>はせぬがなう。」

桂木 一<sup>いつきよう</sup>驚<sup>きつ</sup>を喫<sup>きつ</sup>して、

「や何時<sup>いつ</sup>の間に、」

## 七

「炉<sup>いばら</sup>の中の荊<sup>いばら</sup>の葉が、かち／＼と鳴つて燃えると、雨は上るわいなう。」  
いかにも拭<sup>ぬぐ</sup>つたやうに野面<sup>のづら</sup>一面。媼<sup>おうなつむり</sup>の頭は白さを増したが、桂木の膝<sup>ひざ</sup>のあたりに薄日<sup>うすび</sup>が

射した、但件ただたんの停車場ステーションに磁石を向けると、一直線の北に当る、日金山ひがねやま、鶴巻山つるまきやま、十じ国峠つこくとうげを頂いた、三島の連山の裾すそが直に枯草かれくさに交るあたり、一帯の霧が細流せせらぎのやうに氤氲たなびいて、空も野も幻の中に、一際濃やかに残るのである。

あはれ座右ざうのポネヒル一度声ひとたびを発するを、彼処かしこに人ありて遙はるかに見よ、此処ここに恰あたかも其の霧の如く、怪しき煙が立たうもの、

と、桂木は心も勇いさんで、

「むゝ、雨は歇やんだ、けれどもお媼おばあさんの姿は未だ矢張人間だよ。」と物狂ものくるはしく固か唾たを飲んだ。

此の時媼おばあ、呵々からからと達者たつしやに笑ひ、

「はゝはゝ、お客様も余程のお方ぢやなう、しつかりさつしやれ、気分が悪いのでござろ。なるほど石ころ一つ、草の葉にまで、心を置いたと謂いはつしやるにつけ、何どうかしてござらうに、まづまづ、横にでもなつて氣を落着けるが可よいわいなう、それぢやが、私わしを早はや矢張怪しいものぢやと思つてござつては、何とも安堵あんど出来悪にくかる、可よいわいの。

もつともぢや、お主ぬしさへ命がけで入つてござつたといふ処ところ、私わしがやうな起居たちいも不自由な老寄としよりが一人居ては、怪しうないことはなからうわいの、それぢやけど、聞かつしやれ、

姨捨山おばすてやまというて、年寄としよりを棄すてた名所さへある世の中ぢや、私が世よを棄すて一人住んで居おつたというて、何で怪しう思はしやる。少い世捨人わかよすてびとな、これ、坊さまも沢山たんとあるではないの、まだく、死んだ者に信女しんにょや、大姉居士だいしこじなぞいうて、名をつける習ならいでござらうが、何で又、其の旅商人たびあきうどに婦人おんなが懸想けそうしたことを、不思議ぢやと謂はつしやる、やあ！と胸のぼを伸して、皺だらけの大な手おおきを、薄いよれくわの膝の上。はじめて片手を休めたが、それさへ輪を廻す一方のみ、左手ひだりは尚細長い綿わたから糸を吐はかせたまゝ、乳ちちのあたりに捧たげて居た。

「第一まあ、先刻さつきから慫こうやつて鉄砲てつぽうを持つた者が入つて来たのに、糸を繰くる手を下にも置かない、茶を一つ汲くんで呉くれず、焚火たきびだつて私の方わたくしでして居るもの、変にも思はうぢやないか、えゝ、お媼おばあさん。」

「これはく、お前様は、何と、働きもの、愛想あいそのないものを、変化へんげぢやと思はつしやるか。」

「むゝ。」

「それも愛想がないのぢやないわいなう、お前様は可愛かわいらしいお方ぢやでの、私も内端うちわのもてなしぢや、茶も汲くんで飲あらうぞ、火も焚たいて当らつしやらうぞ。何とそれでも怪しい



かいなう」

「……………」桂木は返す言は出なかつたが、恚う謂はるれば謂はれるほど、却つて怪しさが増すのであつたが。

爰にいたりて自然の勢、最早与みし易からぬやうに覺ゆると同時に、肩も竦み、膝もしまるばかり、烈しく恐怖の念が起つて、単に頼むポネヒルの銃口に宿つた星の影も、消えたかと怯れが生じて、迎も敵し難しと、断念をするとともに、張詰めた気も弛み、心も挫けて、一斉にがつくりと疲労が出た。初陣の此の若武者、霧に打たれ、雨に悩み、妖婆のために取つて伏せられ、忍の緒をプツツリ切つて、

「最う何うでも可うございます、私はふら／＼して堪らない、殺されても可いから少時爰で横になりたい、構はないかね、御免なさいよ。」

「おう／＼可いともなう、安心して一休み休まつしやれ、ちツとも憂慮をさつしやることはないに、私が山猫の化けたのでも。」

「え。」

「はて魔の者にした処が、鬼神に横道はないといふ、さあ／＼かたげて寝まつしやれいの／＼。」

桂木はいふがまゝに、兎も角も横になつた、引寄せもせず、ポネヒル銃のある処へ転げざまに、倒れて寝ようとする、

「や、しばらく待たつしやれ。」

## 八

「お前様一枚脱いでなり、濡れたあとで寒うござろ。」

「震へるやうです、全く。」

「掛けるものを貸して進ぜましよ、矢張内端ぢや、お前様立つて取らつしやれ、何なう、私がなう、ありやうは此の糸の手を放すと事ぢや、一寸でも此の糸を切るが最後、お前様の身が危いで、いゝや、いゝや、案じさつしやるないの。又た不思議がらつしやるが、目に見えぬで、どないな事があらうも知れぬが世間の習ぢや。よりもかゝらず、蜘蛛の糸より弱うても、私が居るから可いわいの、さあゝ立つて取らつしやれ、被けるものは、他にない、あつても気味が悪からうず、少い人には丁度持つて来い、枯野に似合ぬ美しい色のあるものを貸しませうず。」

あゝ、いや、其の蓑みのではないぞの、屏風びやうぶを退ひけて、其の蓑を取つて見やしやれいなう。  
 「と糸車の前をずりもせず、顔ばかり振ふりむ向むかく方かた。

桂木は、古びた雨漏あまもりだらけの壁に向つて、衝つと立つた、唯と見れば一いちりよう領りやう、古蓑ふるみのが描すける墨絵すみえの滝の如く、梁うづばりに掛つて居たが、見てはじめ、人の身体からだに着るのではなく、雨露めつゆを凌しのぐため、破家あばちやに絡まとうて置くのかと思つた。

蜂はちの巣のやう穴だらけで、炉の煙は幾条いくすじにもなつて此処ここからも潜もぐつて壁の外へ染にじみ出す、破屏風やれびやうぶを取とりのけて、さら／＼と手に触れると、蓑はすつぽりと梁はりを放はなれる。

下に、絶壁の礮こうかく　たる如く、壁に雨漏の線が入つた処ところに、すらりとかゝつた、目覚めざめるばかり色好き衣いろよきぬ、恁かかる住居に似合すまいない余りの思ひがけなさに、媼おうなの通力つうりき、枯野かれのちま忽みやまち深山みやまに變じて、こゝに蓑の滝、壁の巖いわお、もみぢの錦にしきかと思つたので。

桂木は目を睜みはつて、

「お媼おばあさん。」

「おゝ、其ぢや、何と丁どよからうがの、取つて搔卷かいまきにきつしやれいなう。」  
 裳もすそは畳たたみにつくばかり、細く裾つまを引合ひきあせた、両袖りやうそでをだらりと、固もとより空蟬うつせみの殻からなれば、咽喉のどもなく肩もない、襟えりを掛けて裏返しに下げたある、衣紋えもんは梁うづばりの上に日の通さぬ、

薄暗い中に振仰いで見るばかりの、丈長き女の衣、低い天井から桂木の背を覗いて、薄煙の立迷ふ中に、一本の女郎花、枯野にイんで淋しさう、然も何となく活々して、扱帯一筋纏うたら、裾も捌かず、手足もなく、俤のみがすらくと、炉の縁を伝ふであらう、と桂木は思はず退つた。

「大事ないく、拾ぢやけれど、濡れた上衣よりは増でござろわいの、主も分つてある麗な娘のぢやで、お前様に殆ど可いわ、其主もまたの、お前様のやうな、少い綺麗な人と寝たら本望ぢやろ、ははははは。」

腹藏なく大笑をするので、桂木は氣を取直して、密と先づ其の袂の端に手を触れた。

途端に指の尖を氷のやうな針で鋭く刺さうと、天窓から冷りとしたが、小袖はしつとりと手にこたへた、取り外し、小脇に抱く、裏が上になり、膝のあたり和かに、棲しとやかに袷の裾なよくと畳に敷いて、襟は仰向けに、譬ば胸を反らすやうにして、桂木の腕にかゝつたのである。

さて見れば、鼠縮緬の裾廻、二枚袷の下着と覚しく、薄兼房よろけ縞のお召縮緬、胴拔は絞つたやうな緋の竜巻、霜に夕日の色染めたる、胴裏の紅冷く飜つ

て、引けば切れさうに振が<sup>ふり</sup>開いて、媼<sup>おうな</sup>が若き時の名残<sup>なごり</sup>とは見えず、当世の色あざやかに、今脱<sup>なまめ</sup>いだかと媚<sup>なまめ</sup>かしい。

熟<sup>じつ</sup>と見るうちに我にもあらず、懐<sup>なつ</sup>しく、床<sup>ゆか</sup>しく、いとしらしく、殊<sup>こと</sup>にあはれさが身に染<sup>し</sup>みて、まゝよ、ころりと寝て襟<sup>えり</sup>のあたりまで、銃<sup>ひつ</sup>を枕<sup>まくら</sup>に引かぶる氣になつた、ものの情<sup>なさけ</sup>を知るものの、慥<sup>か</sup>くて妖魔の術中<sup>おうち</sup>に陥<sup>おち</sup>らうとは、いつとはなしに思ひ思はず。

## 九

「はゝはゝ、見れば見るほど良い孫ぢやわいなう、何<sup>ど</sup>うぢや、少しは落着<sup>おちつ</sup>かしやつたか、安堵<sup>あんど</sup>して休まつしやれ。したがの、長いことはならぬぞや、疲<sup>くた</sup>勞<sup>び</sup>が治<sup>な</sup>つたら、早く歸<sup>かへ</sup>らつしやれ。

お前さま先刻<sup>さき</sup>のほど、血<sup>けつ</sup>相<sup>そう</sup>をかへて謂<sup>い</sup>はしつた、何か珍<sup>めづ</sup>しいことでもあらうかと、生<sup>い</sup>命<sup>のち</sup>がけでござつたとの。良いにつけ、悪いにつけ、此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>人の来<sup>こ</sup>ぬ土<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>へ、珍<sup>めづ</sup>しいお客様ぢや。

私<sup>わし</sup>がの、然<sup>そ</sup>うやつてござるあひだ、お伽<sup>とぎ</sup>に土<sup>みやげ</sup>産<sup>ばなし</sup>話を聞かせましょ。」

と下にも置かず両の手で、静に糸を繰りながら、

「他の事ではないがの、今かけてござる其の下着ぢや。」

桂木は何時かうつら／＼して居たが、ぱつちりと涼い目を開けた。

「其は恁うぢやよ、一月の余も前ぢやわいの、何ともつひぞ見たことのない、都風俗の、少い美しい嬢様が、唯た一人景色を見い／＼、此の野へござつて私が処へ休まじやつたが、此の奥にの、何とも名の知れぬ古い社がござるわいの、其処へお参詣に行くといはつしやる。

はて此の野は其のお宮の主の持物で、何をさつしやるも其の御心ぢや、聞かつしやれ。どんな願事でもかなふけれど、其かはり生命を犠にせねばならぬ掟ぢやわいなう、何と又世の中に、生命が要らぬといふ願があるか、措かつしやれ、お嬢様、御存じないか、というたれば。

いえ／＼大事ござんせぬ、其を承知で参りました、といはつしやるわいの。

いや最う、何も彼も御存じで、婆なぞが兎や角ういふも恐多いやうな御人品ぢや、さやうならば行つてござらつせえまし。お出かけなさる時に、歩行いたせぬか暑うてならぬ、これを脱いで行きますと、其処で帯を解かつしやつて、お脱ぎなされた。支度を直し

て、長襦袢ながじゆばんの上へ袷あわせと一ツ、身軽になつて、すら／＼草の中を行かつしやる、艶々つやつやとし  
たおつむりが、薄すすきの中へ隠れたまで送つてなう。

それから茅萱ちがやの音にも、最うお帰かえりかと、待てど暮らせど、大方例いふとものにへにならつしや  
つたのでござらうわいなう。私わしがやうな年寄としよりにかけかまひはなけれども、何につけて  
も思ひ詰めた、若い人たちの入つて来る處ところではないほどに、お前様も二度と来ようとは思  
はつしやるな。可いいかの、可いいかの。「と間あひを措おいて、緩ゆるく引張つてくゝめるが如くに  
ふ、媼おうなの言が断々たえだえに幽かすかに聞えて、其の声の遠くなるまで、桂木は留南木とめぎの薫かおりに又恍惚うつとり。  
優しい暖かさが、身に染しみて、心から、草臥くたびれた肌を包むやうな、搔かい巻まきの情に半ば眼  
を閉ぢた。

驚破すわといへば、射いて落おとさんず心も失せ、はじめの一いち念ねんも疾とく忘れて、野のにありといふ  
古ふる社やしろ、其の怪あやしを聞かうともせず、目まのあたりに車を廻すあからさまな媼おうなの形も、其の  
まゝ昇かき移すやうに席むしろを彼方あなたへ、小さく遠くなつたやうな思ひがして、其の娘も犧にえの仔細  
も、媼おうなの素性すじようも、野のの状さまも、我が身のことさへ、夢を見たら夢に一切知れようと、ねむ  
さに投げ出した心の裡うち。

却かえつて爰ここに人あるが如く、横に寝た肩に袖そでがかゝつて、胸にひつたりとついた胴拔どうぬきの、

媚かしい下着の襟を、口を結んで熟と見て、噫、我が恋人は他に嫁して、今は世に亡き人となりぬ。

我も生命も惜まねばこそ、慙る野にも来りしなれ、何うなりとも成るやうになつて止め！  
之も犠になつたといふ、あはれな記念の衣哉、としきりに果敢さに胸がせまつて、思はず涙ぐむ襟許へ、颯と冷い風。

枯野の冷が一幅に細く肩の隙へ入つたので、しつかと引寄せた下着の背、綿もないのに暖く二の腕へ触れたと思ふと、足を包んだ裳が揺れて、絵の婦人の、片膝立てたやうな皺が、袷の縞なりに出来て、しなやかに美しくなつた。

啊呀と見ると、女の倅。

## 十

眉長く、瞳黒く、色雪の如きに、黒髪の鬢乱れ、前髪の根も分るゝばかり鼻筋の通つたのが、寝ながら桂木の顔を仰ぐ、白歯も見えた涙の顔に、得も謂はれぬ笑を含んで、ハツとする胸に、媼が糸を繰る音とともに幽に響いて、



「主ぬしのあるものですが、一所いっしょに死んで下さいませんか。」と声あるにあらざ、無きにあら  
ず、嘗かつて我が心に覚えある言ことを引出すやうに確たしかに聞えた。

耳がぐわツと。

小屋が土台から一揺揺れたかと覚えて、物もの凄すさまじい音がした。

「姦婦かんぶ」と一喝いっかつ、雷らいの如く鬱うつし怒いかれる声して、外との方に呼かばはるものあり。此はの声柱はしらを  
動くろくすぶりかして、黒燾くろくすぶりの壁、其の蓑みのの下、袷あわせをかけてあつた処、件ところくだんの巖形いわおがたの破目やれめより、  
岸破がばと倒どうだおしに裡うちへ倒れて、炉の上へ屏風びょうぶぐるみ崩れ込むと、黄に赤に煙が交まじつて※  
と砂煙すなけむりが上あがつた。

ために、媼いぢじの姿が一時消えるやうに見えなくなつた時である。

桂木は弾はじき飛ばされたやうに一問けんばかり、筵むしろを彼方あなたへ飛び起きたが、片手に緊しつかり乎と美  
人を抱いたから、寝るうちも放さなかつた銃を取るに違いとまあらず。

兎角とかくの分別ぶんべつも未だ出ぬ前おそろし、恐おそろしい地震だと思つて、真蒼まつさおになつて、棟むねを離れて遁のがれよ  
うとする。

門かどぐち口くちを塞ふさいだやうに、眼まなこを遮さへぎつたのは毒霧どくぎりで。

彼の野末かののすえに一ひとながれ流しらた白旗はくはたのやうに靡なびいて居たのが、横に長く、縦に広く、ちらと動い

たかと思ふと、三里の曠野、真白な綿で包まれたのは、いま遁げようとするやと殆ど咄嗟の間の事。

然も此の霧の中に、野面を蹴かへす蹄の音、九ツならず十ならず、沈んで、どうと、恰も激流地の下より寄せ来る氣勢。

「遁すな。」

「女！」

「男！」

と声々、ハヤ耳のあたりに聞えたので、又引返して唯壁の崩を見ると、一団の大きな形の形に破れた中は、おなじ枯野の目も遙に彼方に幾百里といふことを知らず、犇々と羽目を圧して、一体こゝにも五六十、神か、鬼か、怪しき人物。

朽葉色、灰、鼠、焦茶、たゞこれ黄昏の野の如き、霧の衣を纏うたる、いづれも拔群の巨人である。中に一人真先かけて、壁の穴を塞いで居たのが、此の時、搔潜るやうにして、恐い顔を出した、面の大きさ、梁の半を蔽うて、血の筋走る金の眼にハタと桂木を睨めつけた。

思はず後居に腰を突く、膝の上に真俯伏せ、真白な両手を重ねて、わななく鬚の根、頸

さへ、あざやかに見ゆる美人の襟を、誰が手ともなく無手と取つて一拉ぎ。

「あれ。」

と叫んだ声ばかり、引断れたやうに残つて、袷のはけぎまにずるゝと畳の上を引摺らるゝ、腋あけのあたり、ちらゝと、残の雪も消え、目も消えて、裾の端が翻へつたと思ふと、倒に裏庭へ引落された。

「男は、」

「男は、」

と七ツ八ツ入乱れてけたゝましい跼音が駈けめぐる。

「叱！」とばかり、此の時覚悟して立たうとした桂木の傍に引添うたのは、再び目に見えた破家の媼であつた、果せるかな、糸は其の手に無かつたのである。慍る時桂木の身は危ふしとこそ予言したれ、幸に怪しき敵の見出し得ぬは、由ありげな媼が、身を以て桂木を庇ふ所為であらう。桂木はほつと一息。

「何処へ遁げた。」

「今此処に、」

「其処で見た。」

と魂消ゆる哉、たまぎかなのし 詈り交すわ。

## 十一

慙かくてしばらくの間あいだといふものは、轡くつわを鳴らす音、蹄ひづめの音、ものを呼ぶ声、叫ぶ声、雑ざ々として物騒ものさわがしく、此の破家あばらやの庭の如き、唯其処ただそこばかりを劃くぎつて四五本の樹立こたちあり、慙かる広野ひろのに停車場ステーションの屋根と此の梢こずえの他には、草より高く空を遮さへぎるものもない、其の辺あたりの混雑こんさつさ、多人数たにんずの踏ふみしだくと見えて、敷満しきみちたる枯草かれくさ、伏ふし、且かつ立ち、窪くぼみ、又倒あたれ、しばらくも休やまぬ間あいだ々々、目まぐるしきばかり、靴わらんじ、草鞋かばの踵かかと、灰汁あくの裏うら爪尖つまさきを上うへに動かすさへ見えて、異類異形いぎよういぎようの蝗いなごども、葉末はすえを飛ぶかとあやまたるゝが、一個ひとつも姿は見えなかつたが、やがて、叱しつ！叱しつ！と相伝あいつたふる。

しばらくして、

「静まれ。」といふのが聞えると、ひっそりした。

枯草かれくさも真直まつすぐになつて、風死しし、そよとも靡なびかぬ上に、あはれにかゝつたのは彼かの胴ど拔うぬきの下着である。

「其奴縛せ。」

「縛れ、縛れ。」と二三度ばかり言をかはしたと思ふと、早や引上げられ、袖を背へ、肩が尖つて、振の半ばを前へ折つて伏せたと思ふと、膝のあたりから下へ曲げて掻い込んだ、後に立つた一本の榛の樹に、荊の実の赤き上に、犇々と縛められたのである。

「さあ、言へ、言へ。」

「殿様の御意だ、男を何処へ秘した。」

「さあ、言つちまへ。」

縛されながら戦くばかり。

「そこ退け、踏んでくれう。」と苛てる音調、草が飛々大跨に寝つきつたと見ると、縞の下着は横ざまに寝た。

艶なる棲がばらりと乱れて、たふれて肩を動かしたが、

「あゝれ。」

「業畜、心に従はぬは許して置く、鉄の室に入れられながら、毛筋ほどの隙間から、言語道断の不埒を働く、憎い女、さあ、男をいつて一所に死ね……えゝ、言はぬか何うだ。」踏躡る氣勢がすると、袖の縫、衣紋の乱れ、波に揺るかと思ふにつれて、霰の如く火

花に肖て、から／＼と飛ぶは、可<sup>いたむべし</sup>傷、引敷<sup>ひつし</sup>かれ居<sup>い</sup>る棘<sup>とげ</sup>を落ちて、血汐<sup>ちしお</sup>のしぶく荊<sup>しん</sup>の実。  
桂木<sup>こぶし</sup>は拳<sup>こぶし</sup>を握つて石になつた、媼<sup>おうな</sup>の袖は柔かに渠<sup>かれ</sup>を蔽<sup>おほ</sup>うて引添<sup>ひきそ</sup>ひ居る。

「殿、殿。」

と呼んで、

「其では謂<sup>い</sup>はうとても謂はれませぬ、些<sup>ち</sup>と寛<sup>くつろ</sup>げて遣<sup>つか</sup>はさりまし。」

「可<sup>よ</sup>し、さあ、何<sup>ど</sup>うだ、言へ。何、知らぬ、知らぬ 黙れ。」

男<sup>した</sup>を慕<sup>した</sup>ふ女の心はいつも男の居<sup>いどころ</sup>所<sup>ところ</sup>ぢや哩<sup>わ</sup>、疾<sup>はや</sup>く、口をあけて、さあ、吐<sup>は</sup>かぬか、えゝ、業<sup>ごうちく</sup>畜<sup>ちく</sup>。」

「あツ、」とまた烈<sup>はげ</sup>しい婦人<sup>おんな</sup>の悲鳴、此の際<sup>とき</sup>には、其の搔<sup>もが</sup>くにつれて、榛<sup>はん</sup>の木<sup>こ</sup>の梢<sup>こずえ</sup>の絶え  
ず動いたのさへ留<sup>や</sup>んだので。

桂木<sup>ぎや</sup>は塞<sup>ふさ</sup>がうと思<sup>おも</sup>ふ目も、鈴で撃<sup>つ</sup>つたやうになつて瞬<sup>またたき</sup>も出来ぬのであつた。  
稍<sup>やや</sup>あつて、大跨<sup>おおまた</sup>の足あとは、衝<sup>つ</sup>と逆<sup>ぎやく</sup>に退<sup>し</sup>つたが、すつくと立<sup>たち</sup>向<sup>むか</sup>つた様子があつて、

切つて放したやうに、

「打て！」

「殺して、殺して下さいよ、殺して下さいよ。」

「いづれ殺す、活けては置かぬが、男の居所を謂ふまでは、活さぬ、殺さぬ。やあ、手ぬるい、打て。答の音が長く続いて在所を語る声になるまで。」

「はッ。」

四五人で答へたらしい、荊の実は又頻に飛ぶ、記念の衣は左右より、衣紋がはら／＼と寄つては解け、解れては結ばれ、恰も糸の乱るゝやう、翼裂けて天女の衣、紛々として大空より降り来るばかり、其の胸の反る時や、紅裏颯と翻り、地に襟のうつむき伏す時、縞はよれ／＼に背を絞つて、上に下に七転八倒。

倅は近く桂木の目の前に、瞳を据ゑた目も塞がず、薄紫に変じながら、言はじと誓ふ口を結んで、然も惚々々と、男の顔を見詰るのがちらついたが、今は慍うと、一度踏みこたへてずり外した、裳は長く草に煽つて、あはれ、口許の笑も消えんとするに、桂木は最うあるにもあられず、片膝屹と立てて、銃を搔取る、袖を圧へて、

「密と、密と、密と。」

低声に畳みかけて媼が制した。

譬ひ此の弾丸山を砕いて粉にするまでも、四辺の光景単身で敵し難きを知らぬでないから、桂木は呼吸を引いて、力なく媼の胸に潜んだが。

其時最後の痛苦の絶叫、と見ると、苛まるゝ婦人さいな おんなの下着、樹の枝に届くまで、すツくりと立つたので、我を忘れて突立ち上ると、彼方はハタと又僵れた、今は皮や破れけん、枯草かれくさの白き上へ、垂々と血が流れた。

「此処ここに居る。」と半狂乱、桂木はつゝと出た。

「や、」「や、」と声をかけ合せると、早や、我が身体は宙に釣られて、庭の土に沈むまで、とばかり。

桂木は投落されて横になつたが、死を極めて起返るより先に、これを見たか婦人の念力、袖の折目の正しきまで、下着は起きて、何となく、我を見詰むる風情である。

「静まれ、無体なことを為申す勿。」

姿は見えぬが巨人の声にて、

「客きやく人じん 何も謂はぬ。

唯御身達のやうなものは、活けて置かぬが夥間の掟だ。」

桂木は舌しゞまりて、

「……………」ものも言はれず。

「斬つ了へ！ 眷属等。」



きらりくと四振の太刀、二刀づつを斜に組んで、彼方の颯と、此方の胸、カチリと鳴つて、ぴたりと合せた。

桂木は切尖を咽喉に、劍の峰からあはれる顔を出して、うろく嫗を求めたが、其の言に従はず、故らに死地に就いたを憎んだか、最う影も形も見えず、推量と多く違はず、家も床も疾に消えて、唯枯野の霧の黄昏に、露の命の男女也。目を瞑ると、声を掛け、「しかし客人、死を惜む者は殺さぬが又掟だ、予め聞かう、主ある者と恋を為遂げるため、死を覚悟か。」

やや  
稍激しく。

おんな  
「婦人は？」

「はい。」と呼吸の下で答へたが、頷くやうにして頭を垂れた。

よ  
「可し。」

改めて、

おんみ  
「御身は。」

諾と答へようとした、謂ふまでもない、此美人は譬ひ今は世に亡き人にもせよ、正に自分の恋人に似て居るから。

けれども、譬<sup>たと</sup>ひ今は世に亡き人にもせよ、正に自分の恋人であればだけでも、可怪<sup>おかし</sup>、枯野<sup>かれの</sup>の妖魔<sup>ま</sup>が振舞<sup>ふるまい</sup>、我とともに死ななといふもの、恐らく案山子<sup>かかし</sup>を剥<sup>は</sup>いだ古蓑<sup>ふるみの</sup>の、徒<sup>いたずら</sup>に風に煽<sup>あお</sup>るに過ぎぬも知れないと思つたから、おもはゆげに頭<sup>かしら</sup>を掉<sup>ふ</sup>つた。

「殿、不実な男であります、婦人<sup>おんな</sup>は覚悟をしましたに、生命<sup>いのち</sup>を助かりたいとは、あきれ果てた未練者<sup>みれんもの</sup>、目の前でずた／＼に婦人<sup>おんな</sup>を殺して見せつけてくれませう。」

「待て。」

「は。」

「客人<sup>はかな</sup>が、世を果敢<sup>はかな</sup>んで居るうちは、我々の自由であるが、一度<sup>ひとたび</sup>心を入交<sup>いれか</sup>へて、恚<sup>いかどころ</sup>る処へ来るなどといふ、無分別<sup>むふんべつ</sup>さへ出さぬに於ては、神仏<sup>しんぶつ</sup>おはします、父君<sup>ちちぎみ</sup>、母君<sup>ははぎみ</sup>おはします洛陽<sup>らくよう</sup>の貴公子、むぎとしては却<sup>かえ</sup>つて冥罰<sup>みやうばつ</sup>が恐<sup>おそ</sup>ろしい。婦人<sup>おんな</sup>は斬<sup>き</sup>れ！ 然<sup>しか</sup>し客人<sup>はかな</sup>は丁寧にお歸し申せ。」

「は。」と再び答へると、何か知らず、桂木の両手を取つて、優しく扶<sup>たす</sup>け起したものがあ

る、其が身に接した時、湿<sup>ひざ</sup>つた木の葉<sup>は</sup>の薫<sup>かおり</sup>がした。

腰<sup>こし</sup>のあたり、膝<sup>ひざ</sup>のあたり、跪<sup>ひざまず</sup>いて塵<sup>ちり</sup>を払<sup>は</sup>ひくれる者もあつた。

銃<sup>よわ</sup>をも、引上げて身に立てかけてよこしたのを、弱々<sup>よわ</sup>と取つて提<sup>ひ</sup>つて、胸<sup>むね</sup>を抱いて見

返ると、縞しまの膝ひざを此方こなたにずらして、紅くれないの衣きぬの裏、ほのかに男を見送つて、分わかれを惜おしむやうであつた。

桂木は倒れようとしたが、踵くびすをめぐらし、衝つと背後向うしろむきになつた、霧の中から大きな顔を出したのは、逞たくましい馬で。

これを片手で、かい退のけて、それから足を早めたが、霧が包んで、蹄ひづめの音、とゞろろくと、送るか、追ふか、彼の停車場ステエションのあたりまで、四間けんばかり間あわいを置いてついて来た。

来た時のやうに立停たちどまつて又、噫あゐ、妖魔にもせよ、と身を棄すてて一所いっしょに殺されようかと思つた。途端に騎馬が引返した。其の間遠あわいざかるほど、人数にんずを増まして、次第に百騎、三百騎、果はては空吹く風にも聞え、沖おきなみを大浪の渡るにも紛まじうて、ど、ど、ど、ど、どと野末のすえへ引いて、やがて山々へ、木精こだまに響いたと思ふと止やんだ。

最早、天地、処ところを隔へだつたやうだから、其のまゝ、銃じゅうこう孔こうを高くキラリと揺り上げた、星ひと一ツ寒く輝く下に、路みちも迷はず、夜よるになり行く狭霧さぎりの中を、台場だいばに抜けると点燈ひともしろう頃。

山家やまがの茶屋の店さきへ倒れたが、火の赫かつと起つた、囲炉裡いろりに鉄網てつあみをかけて、亭主、女房こしども、小児まじりに、餅もちを焼いて居る、此の匂においをかぐと、何どういふものか桂木は人間界へ蘇よ生みがえつたやうな心持こころもちがしたのである。

……

汽車がついたと見えて、此処<sup>ここ</sup>まで聞ゆるは、のんきな声、お弁当は宜<sup>よろ</sup>し、お鮎<sup>すし</sup>はいかゞ。

# 青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「新小説」

1903（明治36）年1月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二世の契

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>